

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅸ

きたおしかわ はか の だん い せき
—北押川・墓ノ段遺跡—

2013

富山市教育委員会

富山市内遺跡発掘調査概要IX

—北押川・墓ノ段遺跡—

2013

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが平成12年度に実施した埋蔵文化財調査のうち、北押川・墓ノ段遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

亀田正夫、西井龍儀、藤田富士夫、岡崎形敷（故人）、株式会社日昇、花崎工業株式会社
(順不同、敬称略)
- 3 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 4 本書の挿図・写真的表示は次のとおりである。
 - (1)方位は真北、水平水準は海拔高である。
 - (2)測量は、地形・方位を考慮し、任意座標を設定して行った。
 - (3)遺構表記は、堅穴建物：SI、土坑：SK、ピット：Pを用いた。
- 5 本書の編集・執筆は、埋蔵文化財センター職員の協力を得て、古川知明が行った。

目　　次

I 調査の経緯	3
II 遺跡の地理と環境	4
III 調査の成果	6
IV 総括	14
図版	18
報告書抄録	26

I 調査の経緯

北押川・墓ノ段遺跡（富山市遺跡番号 201373）は、平成 5 年富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図』に No.373 として搭載した遺跡である。この遺跡は、まず、昭和 47 年 3 月富山県教育委員会発行『富山県遺跡地図』に No.757 「西押川遺跡」として登載し、周知の埋蔵文化財包藏地となった。遺跡の範囲はドットで示され、その位置は、遺跡を横断する主要地方道小杉・婦中線の南西側である。遺跡からは須恵器が採集されている。

その後、昭和 47 年 6～7 月に北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財試掘調査を行い、路線内に「北押川遺跡」を新規に確認し、同年 10～12 月に発掘調査を行った。調査の結果、縄文時代の遺物集中地点 2か所、奈良～平安時代の溝 1 条・ピット群と、旧石器時代のナイフ形石器・縄文前期～中期の土器・石器、奈良～平安時代の須恵器・土師器・鉄滓・羽口等が出土。遺跡は、縄文時代の集落跡、及び奈良～平安時代の製鉄関連遺跡の性格が判明した。

昭和 51 年富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図』には、この北押川遺跡を No.52 とし、西押川遺跡は、No.107 として「墓ノ段遺跡」に改称した。遺跡はそれぞれ緩やかな丘陵面頂部を遺跡範囲として線引きした。

平成 5 年遺跡地図の作成に伴う分布調査の結果、この 2 遺跡は同じ低丘陵上に立地し、両遺跡の中間の遺跡外としていた範囲からも遺物が表面採集されたこと、また、両遺跡とともに、縄文時代や奈良～平安時代の遺物が採集されたこと等の理由から、両遺跡は元来 1 つの遺跡であると理解し、両遺跡をあわせて「北押川・墓ノ段遺跡」と修正・改称した。

平成 10 年 7 月、遺跡内において、3,095 m² の墓地造成計画が立案され、埋蔵文化財の所在について照会がなされた。ほぼ全域が遺跡範囲に含まれていたため、9 月 10 日から 19 日に延べ 6 日間で試掘確認調査を行い、2,050 m² に遺構を確認した。検出した遺構は、縄文時代中期の竪穴建物・土坑、奈良時代の炭窯・須恵器窯・焼壁土坑等である。この結果に基づき、開発主体者と埋蔵文化財の保護措置について協議し、盛土により遺構を保護することとした。

その後、変更設計等の協議もなく、工事は施工されずにいたが、平成 12 年 7 月届出をなされずに工事が着工されたとの地区関係者からの連絡に基づき、現地を確認した。その結果、盛土工事を行うための表土除去工事が行われ、約半分の面積において、遺構上部が掘削される等の損壊が発生したことが明らかになった。富山市教育委員会では工事の中止を求め、事情を聴取したところ、開発主体者が事情を周知していたが、保護のための設計変更を行わず、さらに工事業者に遺跡の保護



第 1 図 北押川・墓ノ段遺跡位置図(1:50,000)



第 2 図 北押川・墓ノ段遺跡試掘対象範囲(網目)

1:2,500

を伝えず工事を強行したことが原因であることが判明した。協議の結果、損壊状況の確認のための発掘調査を行うこととし、損壊の著しい3地点計352m²について、平成12年10月4日から10月19日まで発掘調査を実施した。この範囲の遺構は記録保存措置とした。これ以外の遺跡範囲についてはわずかな表土の残存が認められ、かろうじて残存していることが確認されたため、保護盛土を行い保存することとした。工事業者において造成計画を作成し、現地で計画高さを確認しながら、適切な盛土が行われる計画であることを確認した。

本報告では、この発掘調査のうち、縄文時代の遺構・遺物について報告するものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

北押川・草ノ段遺跡は、射水市との境に広がる射水丘陵東部の境野新台地上に位置する。境野新台地は、隆起した旧扇状地であり、丘陵部は高位段丘面、遺跡のある低丘陵は中位段丘面、その北側の微高地は下位面で、中～下位面は、丘陵地から流れ出る水流により開析を受けて、南西から北東方向に長細い谷地形を幾条も形成する。遺跡は、この谷の間に掲載された帶状の低丘陵の中位面に立地しており、遺跡の北端は傾斜地となって、北の下位面につながる。

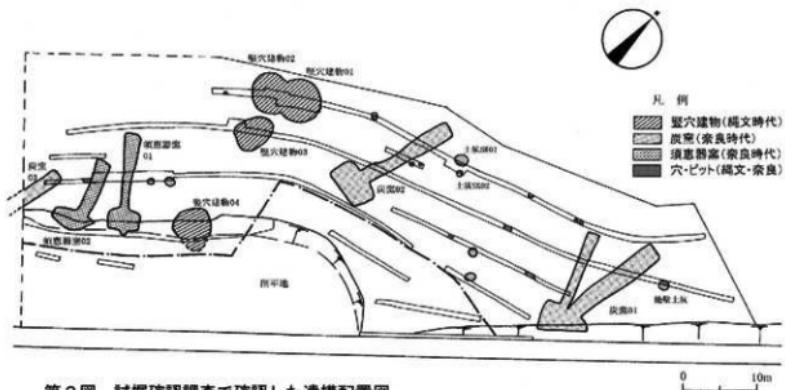
遺跡は中位面一杯に広がり、その範囲は、長軸方向（南西～北東方向）600m、短軸方向 150mである。遺構は中央の高い部分に、縄文時代の遺構、奈良時代の遺構が存在する。東西の丘陵線辺部は斜面となっており、この傾斜地を利用して奈良時代に炭窯・須恵器窯が構築された。

遺跡の標高は、北東端で 28m、南西端で 39m である。

表層は火山灰に由來する粘質の腐植土、いわゆる黒ボクである。その下の地山上は粘質の黄色火山灰層で、再堆積層とみられる。基盤は固い灰色粘土である。傾斜地下部は、水流の開削した谷地形であり、土器や窓体構築に利用が可能な良質の粘土を産出する厚い水成粘土層の堆積が認められる。

2 歷史的環境（第4図）

射水東部丘陵一帯は、起伏に富んだ地形を利用して、旧石器時代から近世まで多種多様な遺跡が



第3図 試掘確認調査で確認した遺構配置図

形成されている。その数も多く、この一帯は富山市でもっとも遺跡密度の高い地域のひとつといえる。

【旧石器時代】 境野新台地や射水丘陵高位面・中位面において、遺跡が点在する。境野新遺跡では、石核・剥片が出土しており、製作遺跡とみられる〔西井・藤田 1976〕。向野池遺跡では、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器がある〔富山市教委 2000b〕。北押川B遺跡では、東山系の石刀と搔器、杉久保系のナイフ形石器等が出土した〔富山市教委 2008b〕。開ヶ丘中山IV遺跡では関東系の茂呂型ナイフ形石器がある〔富山市教委 2001a〕。点数の多い境野新遺跡・北押川B遺跡以外に共通した特徴は、完形の石器が単独あるいは少量出土することであり、短期間の行動の痕跡と評価している〔西井・藤田 1976〕。向野池遺跡では、県内でも数少ない黒曜石製細石刃核が出土した〔富山市教委 2000〕。

【縄文時代】 北押川B遺跡で前期前葉の土器がある最も古い〔富山市教委 2008b〕。前期後葉に境野新台地中位面の北押川C遺跡で単独で竪穴建物がある〔富山市教委 2003a〕。同じ面の南方に離れて平岡遺跡がある。平成 23 年度に主要地方道建設に伴う発掘調査が実施され、前期後半の大規模環状集落であることが確認された。農域・掘立柱建物群・竪穴建物群が検出されている。

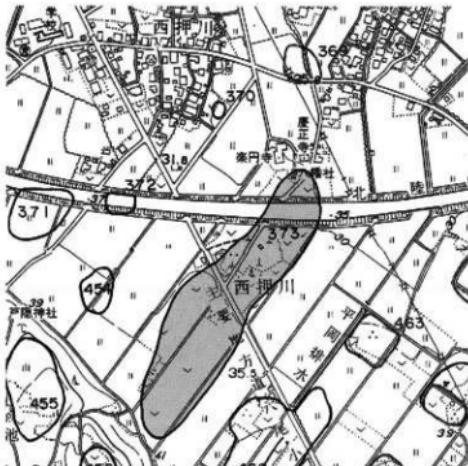
中期には、高位面の開ヶ丘地区において多くの集落の形成がある。中核となる遺跡は開ヶ丘中山Ⅲ遺跡〔富山市教委 2002a・2003b〕、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡〔富山市教委 2003c・2003d・2004a・2004b〕、池多南遺跡〔富山市教委 2005〕があり、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡では竪穴建物 6 棟（前葉～中葉）、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡では 75 棟（前葉～中葉）の竪穴建物と 6 棟の掘立柱建物、池多南遺跡では竪穴建物 5 棟（前葉）が検出された。大規模集落である開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡では、千葉銚子産琥珀製品が出土した〔栗島 2012〕。中期後葉には、境野新南Ⅱ遺跡で、円形石組炉をもつ竪穴建物が 1 棟のみ検出された〔富山市教委 2002c〕。

晩期末には開ヶ丘狐谷遺跡で土器が単独出土した（富山市教委 2002b）。

このほか縄文時代と推定される動物用落し穴遺構が、開ヶ丘地区の高位面を中心に見つかっている。

【弥生時代】 境野新台地中位面の向野池遺跡では、東北天王山系土器を含む整穴建物が 1 棟検出された〔富山市教委 2006〕。古墳中期には、境野新遺跡で堅穴建物 2 棟がある〔富山市教委 1974〕。中期以降は呉羽山丘陵古墳群との関連が推定される。

【奈良時代】 起伏のある地形を利用し、製鉄・製陶がこの一帯で展開され始めた。本遺跡では須恵器窯跡・炭窯が存在するほか、遺跡南半では多量の鉄滓が採集されており、製鉄炉の存在が推定される。東に位置する御坊山遺跡でも、堅型製鉄炉・半地下式登窯形態の炭窯数基が近接して並存した〔富山市教委 2002d〕。北押川B遺跡では、8世紀前葉から製鉄に関わる工房集落が構築され始めた。製鉄炉は、奈良末から平安初期に長方形箱型炉が構築され、工房とみられる掘立柱建



第4図 北押川・墓ノ段遺跡(網目)と周辺の遺跡

(1:10,000) (番号は市道駅番号 201 以下の下 3 桁番号)

物群が並存した。遺跡は 10 世紀迄継続した。奈良期須恵器は開ヶ丘窯からの供給である。〔富山市教委 2008b〕。

須恵器窯は、本遺跡北に近接して北押川窯が所在する。また南方に近接して開ヶ丘窯がある。離れて開ヶ丘窯は奈良後期以降の操業であり、これより早く操業された窯には、本遺跡の南方にやや離れて平岡窯群等があり、白鳳期に遡る。

土師器生産は、本遺跡の東に隣接する御坊山遺跡で開始した。上師器焼成坑 2 基がある〔富山市教委 2008a〕。

開ヶ丘山遺跡では、奈良末から平安初期に、瓦塔を安置する仏堂を作り、竪穴建物群が検出されており、須恵器生産工人集団の居住地とみられている〔富山市教委 2002b〕。

御坊山遺跡では川跡から墨書き土器が出上しており、〔富山市教委 2008a〕。

【平安時代】一帯では、土師器生産が本格化した。境野新台地下位面においては、向野池遺跡で土師器焼成坑 6 基が検出され、鍋や瓦塔を焼成した〔富山市教委 2002c〕。近接して 8 基の掘立柱建物が検出されており、大形の 2 棟は周辺域の土師器・製鉄生産を統括する郡の雜器所の施設と推定されている〔富山市教委 2006〕。その近傍地での土師器焼成坑は、ガメ山遺跡で 1 基〔富山市教委 2002e〕がある。開ヶ丘地区の高位面では、開ヶ丘ヤシキダ遺跡で、上師器焼成坑 4 基と工房とみられる竪穴建物 6 基等を検出した〔富山市教委 2003b〕。この時期の須恵器窯は高位面の奥に移動し、付近には構築されていない。

【中世】境野新台地上の中・下位面から、一定間隔で直線的に並ぶ土坑群が検出されている。野下遺跡〔富山市教委 1985〕や北押川 C 遺跡〔富山市教委 2003a・2008a〕で例がある。北押川 C 遺跡では水脈を迫った井戸群としたが、戰国期の戰略的な落し穴とする説がある〔古川 2005〕。遺跡南方には中世に一大勢力となつた北畠山各願寺が所在し、富山から砺波増山城へ抜けるルート上にこれらが遮断するように所在する。

III 調査の成果

調査では、縄文時代の集落及び奈良時代の須恵器・木炭窯跡群が検出された（第 3 図）。

本稿では、縄文時代の遺構遺物について報告を行うものとし、奈良時代の遺構・遺物の報告は後日を期す。

縄文時代の遺構は、竪穴建 4 棟、土坑 1 基を検出した。出土遺物は、縄文土器がある。

1 遺構

(I) 竪穴建物

① S 101 (第 5・10 図)

南側は S 102 と重複する。

石組炉・柱穴・住居内溝を確認し、炉周辺において確認できた叩き土間の範囲から、建物空間を把握した。壁面は完全に欠失している。柱穴の配列関係、住居内溝が 2 列存在すること、石組炉が複層確認できることから、この建物は 2 回以上の延命が推定できる。以下、古い時期を 1 期、新しい時期を 2 期とし、2 期から記述を進める。

2 期

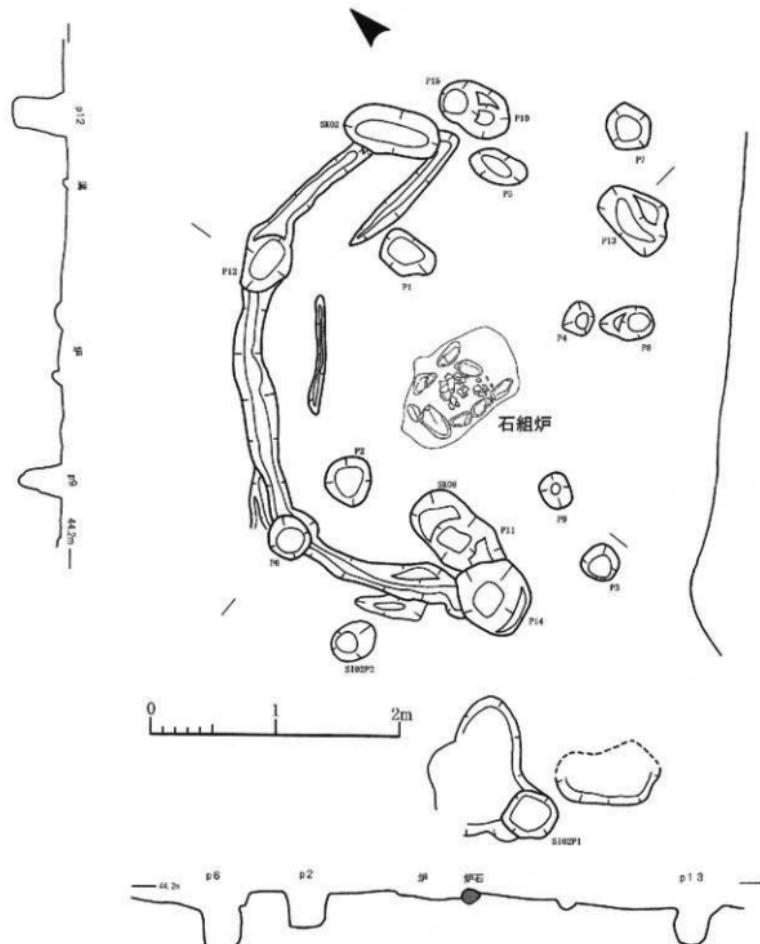
この時期の構造は、6 本主柱で、中央に石組炉を置く。主柱穴の外側に溝を巡らす。建物主軸は、N・50°-E で、丘陵地形全体の延伸方向 (N・33°-E) よりやや東に偏っており、集落東縁の傾斜地の方向 (N・50°-E) を意識していると思われる（第 6 図）。

主柱穴は、p1,p2,p11,p9,p4,p10 の 6 本で、径 30~40cm、床面からの深さ 21~39cm である。

P6 の柱底面には径 14cm 厚さ 3cm の粘土が敷かれ、補強されていた。

柱配置は、炉を囲んで $1.5m \times 1.9m$ の台形状に 4 本が配置され、建物長軸上の柱穴内からは、繩文土器小片・小礫が出土した。

溝は、1 期建物の叩き土間床面上に残る。高台側となる北西側にのみ存在し、柱穴より外側に設けられている。柱間に直線的に短く設けられ、それぞれ独立して途切れる。1 本は長さ 125cm、幅 15cm、深さ 6~8cm、もう 1 本は長さ 97cm、幅 9cm、深さ 1.5~2.5cm で、小規模である。この



第 5 図 窓穴建物 S 101 実測図

溝は壁面下に設けられた壁溝と考えられる。

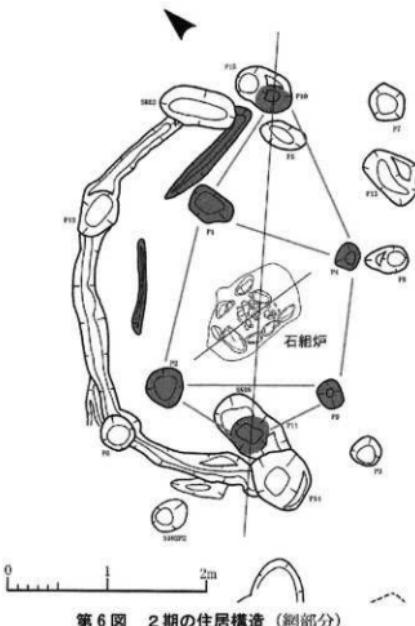
床面は叩き土間で、壁溝内側まで及ぶ。ただし、1期建物の床を利用しておらず、その影響が及ぶ。

炉は石組炉で、2回の変遷が認められる。

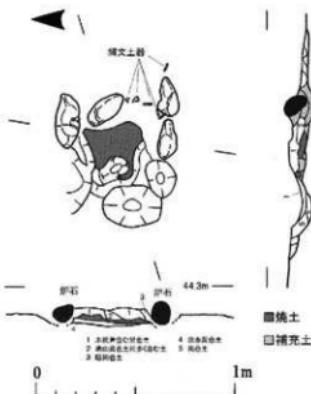
最終面（第7図1）は、土器敷き炉である。亜円窓8個を使用し、東西方向に長い長方形に組む。西側短辺は、割れた大きな石を1石置き、小石を沿わせて隙間を埋める。長辺は20cm大の細長い石3石を直列にする。北辺の1石は抜かれている。東辺の石は、やや内側に入っているが、これは移動した可能性があり、欠けた北辺の石か、あるいは東辺に置かれた2石のうち1石の可能性がある。元来の大きさは、長外辺88cm 短外辺60cmの長方形と考えられる。炉内寸は60cm×35cmに復元される。炉の主軸方向はN 80° Wであり、建物主軸とは50度（130度）のずれがある。炉内部には、土器片が敷かれており、いわゆる土器敷き炉である。土器は内面を上にし、大型破片を隙間を開けて置く。炉石・土器片は火熱を受けており、炉石には変



第7図 1 : 2期の石組炉（最終面）



第6図 2期の住居構造（網部分）



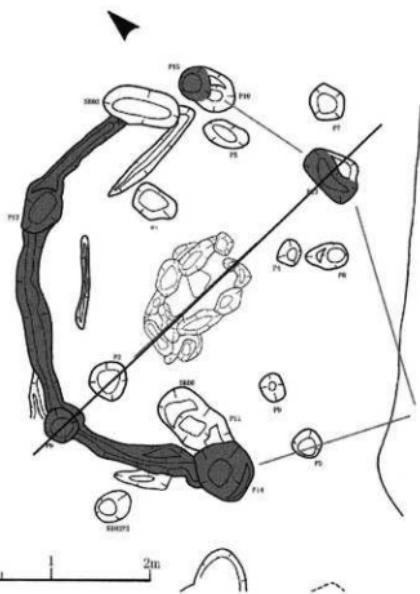
2 : 2期の石組炉（初期面）

色・破断が認められる。

初期面（第7図2）は、土器を敷かず、硬化した焼土が底面に残る。残存する焼土面の広さは、30cm×25cmである。東側が大きく弧状になっているのは、炉石形状に呼応したためと考えられる。この面の範囲が炉石内部の形状を示していると仮定すると、7石程度で構成され、正方形炉が復元できる。その大きさは、内寸30cm×30cm、外寸70cm×60cmである。炉の主軸は最終面とほぼ同じN-80°Wである。

なお、炉内南側には円形の落ち込みがあるが、これは炉石痕跡ではなく、擾乱痕跡である。

以上により、2期におけるこの建物は、長軸方向4.4m、短軸方向3.5mの平面橢円形の堅穴建物に復元でき、炉は正方形炉から長方形炉に途中で変更されたことが



第8図 1期の住居構造（網部分）

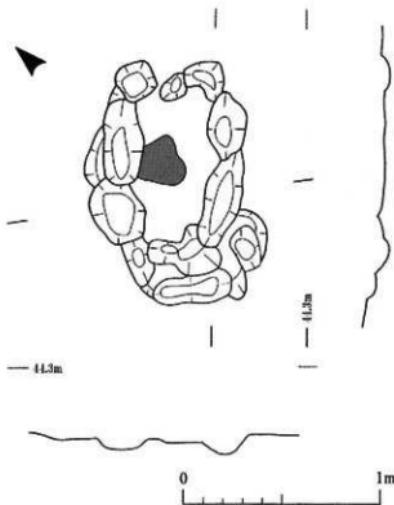
推定される。

1期

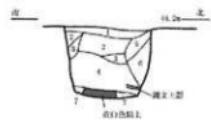
この時期の構造は、5本あるいは6本主柱で、中央に石組炉を置く。主柱穴4本を結ぶ弧状溝を巡らす。建物主軸は、N-85°Wである（第8図）。2期建物とは45度（135度）のずれがある。

主柱穴は、p12, p6, p14, p15, p13の5本で、p14の東側の未調査地にもう1基存在し、6本主柱となる可能性がある。また、小径であるが、p14と未検出の主柱との間に存在するp3もこれに属する可能性がある。柱穴は1.6～2.3m間隔で円形の配列となる。

5本の主柱は、径30～50cm、床面からの深さ26～50cmである。1期建物の主柱穴より一回り大きくかつ深い。P6内部からは、縄文土器の大きな破片が出土した。底面から5cm以上浮き上がっており、壁面に斜めに寄りかかっていることから、柱抜き



第9図 1期の石組炉



S 101 p 2

p 2 土層注記

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 大きな黄色地山 BLOCK を含む
- 3 くすんだ黄色土
- 4 暗褐色土 木炭片を含む
- 5 暗黄色土
- 6 暗黄色土 粘質の黄白色 BLOCK を含む
- 7 くすんだ黄色土



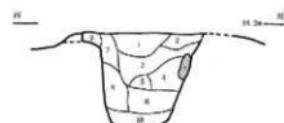
S 101 p 6



P 6 土層注記

- 1 黒褐色土 黄色地山粒・木炭粒含む
- 2 暗褐色土 黄色地山粒多く含む

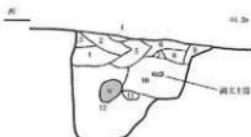
S 101 p 6 断面



S 101 p 14

p 14 土層注記

- 1 暗褐色土 黄色地山粒含む
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土 BLOCK を含む
- 4 暗褐色土 木炭片を含む
- 5 黄白色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土 木炭片を含む



S 101 p 10

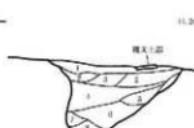
p 10 土層注記

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 黄色地山粒多く含む
- 5 黄色地山粒・黄色土 BLOCK 主体
- 6 暗褐色土 地山黄色粒を多く含む
- 7 地山 黄色土 BLOCK
- 8 黑褐色土 地山 黑褐色土小 BLOCK 含む
- 9 地山 黄色土
- 10 暗褐色土 黄色地山粒・小 BLOCK 含む
- 11 黄白色土 しまりなし
- 12 暗褐色土 黄色地山粒多く含む

S 101 p 12

p 12 土層注記

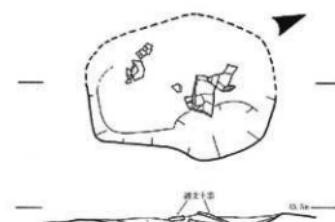
- 1 暗褐色土
- 2 黄色地山粒・黄色土 BLOCK
- 3 暗褐色土 地山黄色粒を多く含む
- 4 黑褐色土 木炭片を含む
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 粘質
- 7 暗褐色土
- 8 黄褐色土 硫を含む
- 9 暗褐色土 粘質



S 101 p 13

p 13 土層注記

- 1 暗褐色土 黄色地山粒多く含む
- 2 暗褐色土 黄色地山粒多
- 3 暗褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 黄褐色粘土 BLOCK を含む
- 7 黑褐色土
- 8 暗褐色土 黄色地山粒含む



SK02 土層注記

- 1 暗褐色土 黄色地山粒・木炭粒含む
- 2 黄褐色土

第10図 造構実測図(1:20)



取り時に転落して入ったものであろうか。

P14の上部には小礫数個が存在し、柱固定補強をしたものと推定される。

土柱を結ぶ溝は、南西のp14を起点とし、p6、p12と延び、p15へと進むが、その手前で消滅する。土坑SK02と重複するため、消える位置は確認できないが、SK02のすぐ西側で一段浅くなるところがあり、そこが最終地点と推定される。

溝の規格は、幅15~25cm、深さ6~15cmである。細かく見ると、溝底面レベルは一定していない。p15-p12間ではp12方向へわずかに低くなる。P12-p6間は、凹凸がありつつも、全体としてp6方向へ低くなる。p6-p14間は、ほとんど凹凸がなく、全体としてわずかにp6方向に低くなる。全体としてどこかに集めるといった傾向は認められないといえる。

床面は叩き土間で、柱を結ぶ溝内側まで及ぶ。床面はほぼ水平であるが、部分的に傾斜する地点がある。炉の北西側においては、炉に向かって緩く傾斜し、また、炉の北東側においては、外側に向かって緩く傾斜する。

炉は当初石組炉であったが、炉石が全て抜き取られていた（第9図）。抜き取り痕は、それぞれの炉石の形に地山を掘り留めているため、炉石數を復元すると11石もしくは12石となる。南～南西辺には2重に石を配する。これにより復元できる炉の規格は、内寸長軸80cm 短軸30cm、外寸長軸125cm 短軸80cmである。主軸方向は、N-85°Wであり、建物主軸と一致する。平面形状は隅丸長方形で長辺が中央で外側に張り出す太鼓形である。炉底面は、地山黄褐色土であり、炉中央北西に偏って25cm×25cmの火熱による赤化面が残る。このように1期の炉は、2期建物最終形よりも大きく長い炉であるといえる。

② S I 02 (第11図)

北側はS I 01と重複する。試掘確認調査で石組炉とその周囲の叩き土間面を確認した。

試掘トレンチにおいて確認した住居規模は、東西方向に約5mであり、平面形は円形または梢円形とみられるが、南西隅はやや屈曲が強いことから、隅丸の半円形の可能性もある。

かは、準円礫・準角礫11石を使用して、外辺で105cm×61cmの長方形に組んだものである。南西側は2列に置かれ、外側石は小さい。北西長辺の炉石は、数個が抜かれたと考えられる。石組の内寸は、長辺64cm 短辺28cmである。内部下面には、一部の確認であるが、土器片が敷き詰められており、上器敷きかである。炉石配置のため一旦大きく掘り下げられており、その範囲は110cm×72cmである（第10図中点線範囲）。

炉の長辺主軸は、N-52°Eである。S I 01の2期住居の主軸とほぼ同じである。

③ S I 03

S I 01・02の東側に約70cm離れて所在する。建物権上は、黒褐色土である。

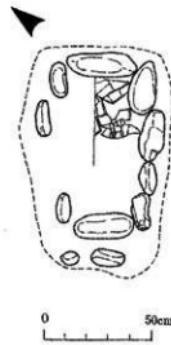
試掘トレンチにおいて確認した住居規模は、東西方向に約5mであり、平面形は円形または梢円形とみられるが、南西隅はやや屈曲が強いことから、隅丸の半円形の可能性もある。

建物中央から北寄りにおいて、縄文土器の集中が認められた。縄文中期に属する。

④ S I 04

S I 03の東側に約10m離れた、傾斜地下部に所在する。建物権上は黒褐色土である。

T事により、中央から東側の削平を受けており、掘削断面に住居中央部の落ち込み（壁、床面）と炉石2石が露出していた。周囲の掘削土中からは炉石とみられる礫片が9点ほど見つかっており、これがこの建物の石組炉を構成していた炉石残片と考えられる。



第11図 S I 02 石組炉

掘削断面で確認した建物規模は、北東—南西方向で約 5.2m、北西—南東方向は削平を受けており、残存部分で最大 4.5m である。掘削断面の端で石が検出されているところから、この竪穴建物は、北西—南東方向に長い建物であることが推定できる。

土坑 SK02(第 10 図右下) 竪穴建物群の東 20m において検出した。平面形は橢円形、断面は浅い皿状である。規格は、長軸 75cm、短軸 55cm で、深さ 10cm である。

覆土上半は褐色土で、縄文土器を含む。底面から 5cm 程度浮いていることから、遺構廃絶後しばらくたってから廃棄されたものと考えられる。

2 遺物(第 11 図、図版 7・8)

縄文土器がある。

1,2 は同一個体の深鉢である。半截竹管文と隆起帯による弧状の文様構成である。口縁は半截竹管による連続爪形文が横走する。横位無文帯には連続刺突文を施す。隆帶上も同じ連続爪形文である。隆帶は S 字状に下垂し、先端は渦を巻くほどには至っていない。器壁は薄く、胎土には砂粒を多く含む。他の十器と胎土が異なり、搬入品の可能性がある。S I 01p3 出土。

3 は横位に沈線を引き、上は無文帯、下はやや隆起した面に L R 縄文原体を右上—左下方向に転がす。S I 01p15 出土。

4 は深鉢口縁部で、口縁端は無文帯、その下は、L R 縄文原体を横に転がす。S I 01p12 出土。

5 は細かい L R 縄文原体を横に転がす。外面は摩耗が著しく、煤が多く付着する。粘土接合帯痕が顕著で、粘土帯の幅は 2cm と 3cm である。S I 01p12 出土。

6 は浅鉢の体部である。内外面ともに丁寧に磨き仕上げを行う。S I 01p6 出土。

7 は深鉢胴部で、外面に R L 縄文原体を横に転がす。上下粘土接合帯で、幅 3cm である。S I 01p9 出土。

8 は浅鉢の体部である。外面はケズリ整形の後丁寧に磨き仕上げを行う。器壁は薄い。S I 01p2 出土。

9 は深鉢胴部下半で、外面に L R 縄文原体を上に転がす。S I 01p16 出土。

10 は胴部下半で、外面に断面三角形の沈線を縱に引く。間隔はランダムである。使用した原体は、先の尖ったヘラ状工具である。粘土成形がスムーズでなく、表面の凹凸が顕著である。S I 01 内出土。

11 は深鉢胴部で、外面に L R 縄文原体を横に転がす。S I 01p9 出土。

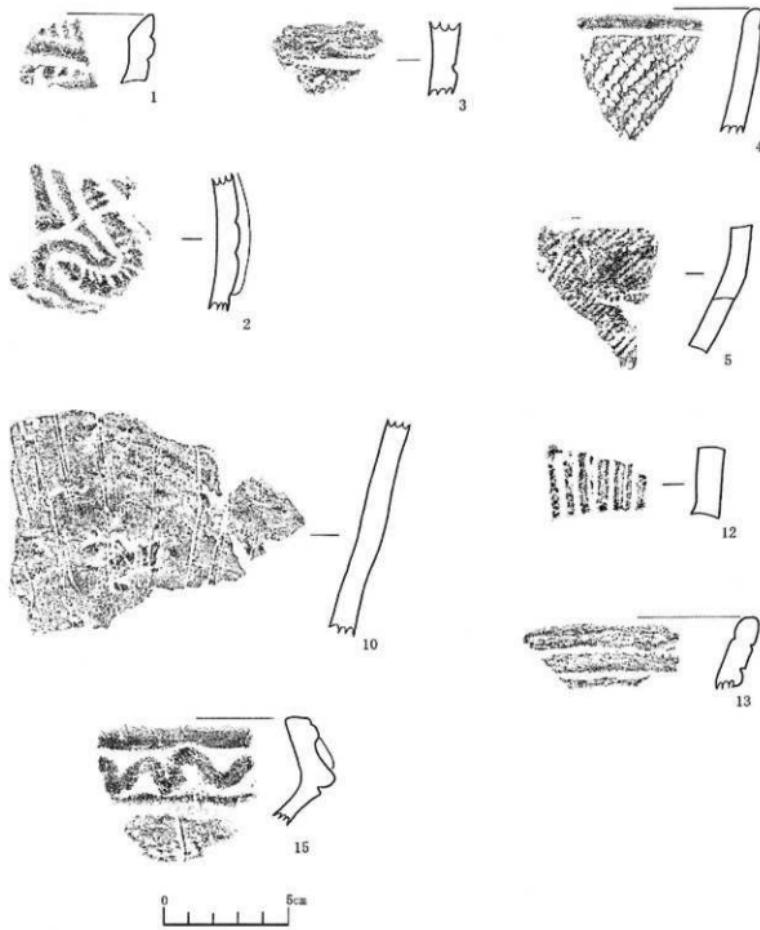
12 は深鉢胴部下半で、半截竹管文を密に下垂する。上下粘土接合帯で、幅 3cm である。S I 01 内出土。

13 は短く外反する深鉢口縁部である。口縁内面には 1 条の沈線が横走し、これは半截竹管を使つて付けたものである。外面の口縁端は、半截竹管を横に引き、間隔をおいて下に半截竹管文を横に引く。S I 01SK02 出土。

14 は、浅鉢口縁部である。内外面ともに丁寧に磨き仕上げを行う。S I 01SK02 出土。

15 は浅鉢とみられる。口縁はくの字形に折れ、内傾する。口縁端は平縁である。口縁外面は、粘土紐を波状に貼り付けて文様としている。胴部上半は、R L 縄文原体を左上—右下方向に転がす。S I 01p7 出土。

これらは縄文中期中葉に属する。



第 11 圖 遺物実測図

IV 総括

1 遺跡の性格

北押川・墓ノ段遺跡の縄文時代中期の様相については、1972年の発掘調査と今回の調査成果を合わせて考えてみたい。

北陸自動車道建設に伴う遺跡北部の調査地点では、遺物集中地点2か所と土坑が確認された。遺物集中地点は、径約4~5mの範囲に、縄文土器や石器が分布すると報告されている。1か所は5cmほどすり鉢状にくぼんでいたが、炉や土坑が検出されていないため、堅穴建物とは言えず、廃棄場を見るべきであろう。

一方今回調査地点では、堅穴建物が4棟検出されている。2棟が重複し、うち1棟では2期以上の建替が認められていることから、長期にわたる居住が推定される。

これらの建物は、丘陵東側の比較的まとまった狭い地域に集中しており、南北方向に並んでいる。

この居住域と北部の遺物集中地点域の間の空間においては、堅穴建物ではなく、わずかに土坑数基が点在するにすぎない。

以上の遺構分布状況から推定して、本遺跡における縄文中期の空間構成について概括したい。遺構分布範囲、すなわち集落域は、本遺跡の北部において設定され、その範囲は東西100m、南北160mである。集落域内における空間構成は、南部が居住域、北部が遺物廃棄域であり、その中間は遺構の少ない広場的空間に区分される（第12図）。

遺物廃棄域における使用開始は、中期初頭である〔富山市教委1973〕。

なお、この区域における西半部は未調査のためデータがない。今後の調査により詳細な情報が得られれば、より具体的な空間構造が明らかになるであろう。現時点では推測という形で提示したものであることを付記しておきたい。

2 堅穴建物S101について

複数棟検出された堅穴建物のうち、詳細が確認できたのはS101号建物の1棟のみである。この建物は、柱穴において2期、炉において3期の変遷を認めた。

大きな画期は、平面形と柱構造が変化する1期から2期への変化といえる。1期は円形または半円形の平面形で、柱も円形配列であるのに対し、2期は梢円形の平面形で、柱は亀甲形配列である。

このような構造の変化は、建物上層の構造変化を伴うものであったと考えられる。一方で、炉の位置は変化せず一定であるが、石組炉は小形化する傾向にあり、また最終には上器敷きとする。

中期中葉における堅穴建物の変遷については、堀沢祐一氏による分類がある〔堀沢2003〕。これによれば、中期中葉の建物の様相として、平面形は円形・長円形・隅丸方形があり、石組炉が定着はじめる。主柱は4~6本で、主柱間の溝、埋甕、ベッド状遺構、ロート状ピット〔古川1996〕が付属するものがあるとする。その後、富山市開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡において中期前葉から中葉の堅穴建物75棟が検出され、検討資料が追加された。



第12図 北押川・墓ノ段遺跡の縄文中期遺構分布

これらの建物群のうち、F 区 S 101 号建物は、平面形は隅丸方形で、中央に長方形石組、主柱は 6 本、主柱間の溝（内溝）と壁際の溝（外溝）が共存し、ロート状ピット 1 基が伴う。この建物は、長辺 7.3m × 短辺 5.5m と一般建物よりやや大きい。炉もこれに呼応して大きく、長辺 165cm × 短辺 70cm で、16 個の炉石を使用し、土器敷きは認められない〔富山市教委 2004b〕。

北押川・墓ノ段遺跡 S 101 号建物は、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡 F 区 S 101 号建物と比較すると、ロート状ピットが存在しないという点が大きく異なり、その他の施設構造は類似している。しかし北押川・墓ノ段遺跡 S 101 号建物は、これまで検討したように、大きく 2 期の変遷があり、また 2 期においては炉の変遷も認められていることから、総体的には類似するものの、それぞれの時期の構造要素から見れば、異なる点も多いといえる。さらに、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡 F 区 S 101 号建物では柱数から建替えの可能性も指摘されており、溝などについても建替え前後で異なる可能性もあることから、各施設の共存性については再考の余地があろう。

このような基本的的理解の上において、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡における中期中葉の堅穴建物との比較を行う。ここでは前述の F 区 S 101 号建物を含め 51 棟が検出された。残る 24 棟は中期前葉である。51 棟のうち、溝をもつものは 19 棟があり、残る 32 棟は溝がない。溝がある 19 棟のうち、柱間にあるものは 12 棟、壁際にあるものは 6 棟であり、柱間と壁際に両方にあるものは、前述の F 区 S 101 号建物の 1 棟のみであり、他の 18 棟は柱間に壁際にかのいずれかである。柱間に溝をもつものは 3 分の 1 を占める。よってこの事実は、前述の F 区 S 101 号建物における内溝と外溝の共存について、見直す強い根拠となろう。

開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡では、中期前葉において溝をもつ建物が 6 棟検出されており、いずれも壁際の溝のみである。中期前葉における壁際溝の検出事例は、富山市北代遺跡第 70 号建物〔富山市教委 1998〕のほか、富山市八尾町長山遺跡第 3 号建物、朝日町馬場山遺跡 G2・G3 号建物、砺波市巖照寺遺跡 5 号建物がある〔堀沢 2003〕。

一方内溝と外溝の共存については、中期後葉に入つてから一般化する。富山市直坂遺跡では、1・2・4 号建物において共存が認められる。ほぼ同時期と推定される他の 3・5 号建物は壁際溝のみである〔堀沢 2003〕。

以上の様相を踏まえれば、建物内溝は、中期前葉において壁際溝が出現し、中期中葉において柱間を結ぶ溝が出現した。ただしこの両者は中期中葉において同一住居内に共存することはなかった。中期後葉には共存が一般化していくとみられるといった変遷が追える。このような流れからみて、F 区 S 101 における内溝と外溝の共存は、先に見た時期差と捉えるか、両者は共存するのであって中期後葉の一般化に先立つ萌芽事例と捉えるか、の選択肢が生じたということになる。建物内出土土器の型式変遷の検証を踏まえて議論を深める必要があるが、本稿ではそこまで検証を成し得ないため、後考に委ねたい。

なお、壁際溝の性格については、壁面直下に壁に沿う形で掘られており、北代遺跡第 70 号においては等間隔で杭打ち込み跡が認められることから、壁面となる周堤部の上崩れを防止する目的で板材を並べ、それを細杭が留める構造が復元されている〔富山市教委 1998〕。したがって、板壁を並べるための固定溝と推定される。柱間を結ぶ溝は、柱を基準とした空間の間仕切りを行うための板壁を固定する性格、あるいは、柱を伝ってたまつてくる水または水分を排出するための溝等の性格が考えられる。

また、右組炉については、中期中葉は多様性が認められる。開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡における石組炉をみると、その出現は中期中葉であり、中期前葉はすべて地床炉である。堀沢の指摘は追認できる。炉の形状は、円形または梢円形、方形または長方形、D 字形の概ね 3 種類に分類できる。D 字形とは、方形または長方形の短辺の一方が丸くなる、あるいはくの字形に変形しているものである。これら 3 種の時間的変遷については不明である。炉内土器敷きについては、方形・長方形や D 字形に

多く、円形・楕円形には少ない。土器敷き炉については、北押川・墓ノ段遺跡S I 01号建物の炉の変遷において最終段階での出現であることから、時間差が主な要因と理解できるが、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の例からは炉の形状が影響している側面もあるかもしれない。

北押川・墓ノ段遺跡S I 01号建物の存在は、近接距離にある開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡との関連性において理解すべきであろう。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は当該期における中核的集落という位置づけはゆるが、本遺跡のような中小規模の集落が周囲に点在するといった構造が予測され、それらは中核集落と何らかの関連性を保ちつつ共存していたと考えられる。その関係においては建物構造など共通性がみられて当然であろう。今回の検討はそれを裏付けるものであるといえよう。ただし、先述のように開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡における変遷の検証が課題として残された。

中期前葉

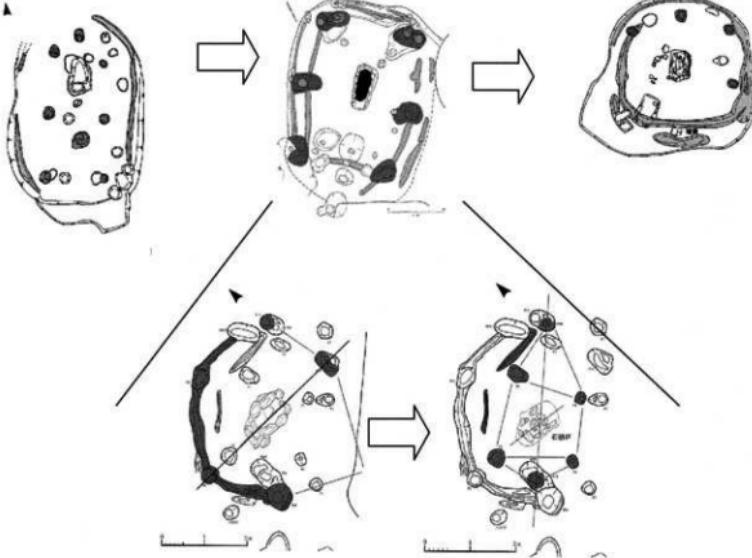
砺波市嚴照寺5号建物
炉：地床炉
溝：壁溝
施設：ロート状ピット

中期中葉

富山市開ヶ丘狐谷ⅢFO1号建物
炉：石組炉
溝：壁溝・柱間溝
施設：ロート状ピット

中期後葉

富山市直坂2号建物
炉：石組炉+土器敷き
溝：壁溝+柱間溝
施設：埋甕



中期中葉

北押川・墓ノ段SI01号建物1期
炉：石組炉
溝：柱間溝

中期中葉

北押川・墓ノ段SI01号建物2期
炉：石組炉+土器敷き
溝：壁溝

参考文献

- 栗島義明 2013 「コハクの利用と縄文社会」『考古学ジャーナル』627 ニューサイエンス社
- 富山市教育委員会 1973 『富山市北押川遺跡』
- 富山市教育委員会 1974 『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1985 『富山市野下遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1998 『史跡北代遺跡発掘調査概要Ⅱ—ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査』
- 富山市教育委員会 2000a 『境野新遺跡・向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2000b 『富山市向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2001a 『富山市開ヶ丘中山IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002a 『富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中山V遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002b 『富山市開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002c 『富山市境野新IIII遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002d 『富山市御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002e 『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003a 『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003b 『富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘狐谷III遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003c 『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡・開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘狐谷IV遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003d 『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷III遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004a 『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2004b 『富山市開ヶ丘狐谷III遺跡・開ヶ丘狐谷II遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2005 『富山市池多南遺跡・池多南II遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006 『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008a 『富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008b 『富山市北押川B遺跡発掘調査報告書』
- 西井龍儀・藤田富士夫 1976 『吳羽山丘陵の先土器・縄文時代草創期の遺跡について』『大境』第6号 富山考古学会
- 古川知明 1996 「ロート状ピットを伴う縄文中期堅穴住居跡について—北陸型特殊ピットの検討—」『考古学と遺跡の保護—廿祐健先生退官記念論集』
- 古川知明 2005 「落し穴状遺構の…解釈—中世における戦略的落し穴…」『大境』第25号 富山考古学会
- 堀沢祐一 2003 「富山県内の縄文時代堅穴住居について～前期から中期にかけて～」『富山市北押川C遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会



遺跡遠景（南から）



調査区遠景（東から）



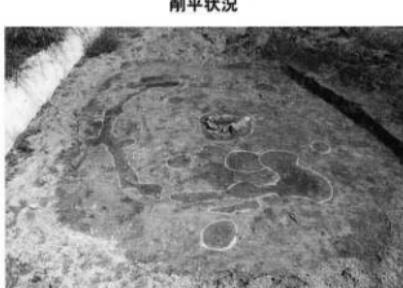
試掘状況（北東から）



削平状況



遺構検出状況（炭窯）



豊穴建物 S I 01 検出状況（南東から）



豊穴建物 S I 01 炉検出状況（試掘時）



豊穴建物 S I 01（南西から）



竪穴建物 S 101 完掘状況（南西から）



竪穴建物 S 101 完掘状況（北西から）



竪穴建物 S I 01 2期石組炉 最終面（南から）



竪穴建物 S I 01 2期石組炉 最終面（東から）



竪穴建物 S I 01 石組炉 断面（北から）



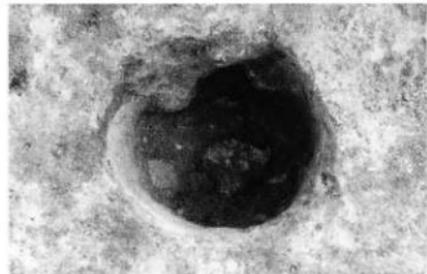
竪穴建物 S I 01 2期石組炉 （西から）



竪穴建物 S I 01 1期石組炉埋土（北から）



竪穴建物 S I 01 1期石組炉埋土（西から）



竪穴建物 S I 01 2期住居柱穴 p2 柱底部粘土敷



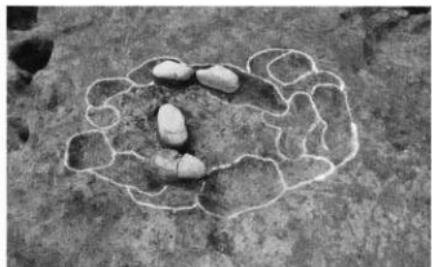
竪穴建物 S I 01 SK07 土器出土・08 土層断面



竪穴建物 S I 01 1期石組炉（南東から）



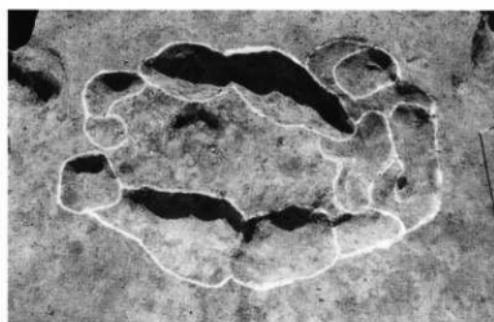
竪穴建物 S I 01 1期石組炉（東から）



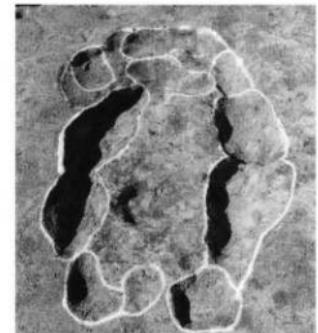
竪穴建物 S I 01 1期石組炉（北西から）



竪穴建物 S I 01 1期石組炉（南西から）



竪穴建物 S I 01 1期炉最下部（東から）



竪穴建物 S I 01 1期炉最下部（南から）



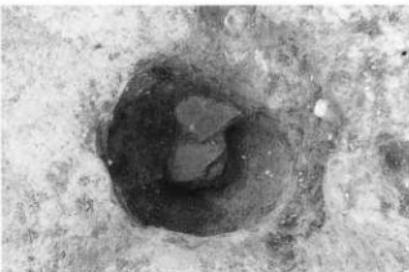
竪穴建物 S I 01 1期柱穴 p14 土層断面（南から）



竪穴建物 S I 01 1期柱穴 p14 完掘状況（南から）



竪穴建物 S I 01 1期柱穴 p6 土層断面（南から）



竪穴建物 S I 01 1期柱穴 p6 内土器出土状況（南から）



竪穴建物 S I 01 1期柱穴 p13 土器出土状況



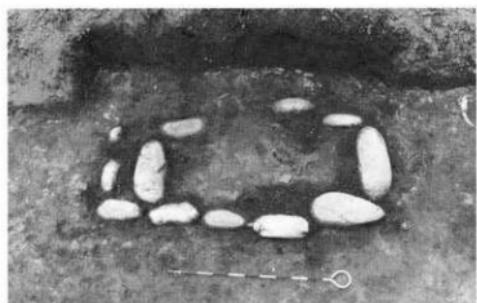
竪穴建物 S I 01 土坑 SK02 土器出土状況



竪穴建物 S I 02 検出状況（南東から）



竪穴建物 S I 02 全体（南東から）



竪穴建物 S I 02 石組炉検出状況（南東から）



竪穴建物 S I 02 石組炉内底部土器敷



竪穴建物 S I 03 輪郭検出状況（南西から）



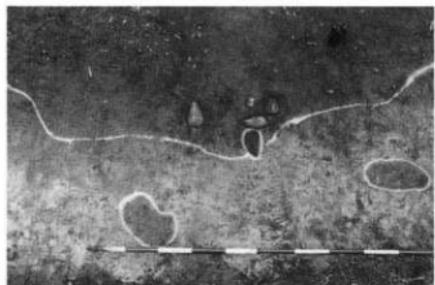
竪穴建物 S I 03 縄文土器出土状況



竪穴建物 S I 04 検出状況（東から）



竪穴建物 S I 04 炉石検出



竪穴建物 S I 04 炉石残存状況



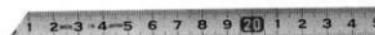
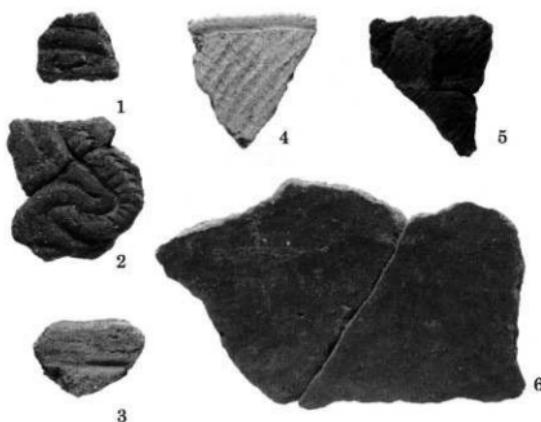
竪穴建物 S I 04 掘削された炉石



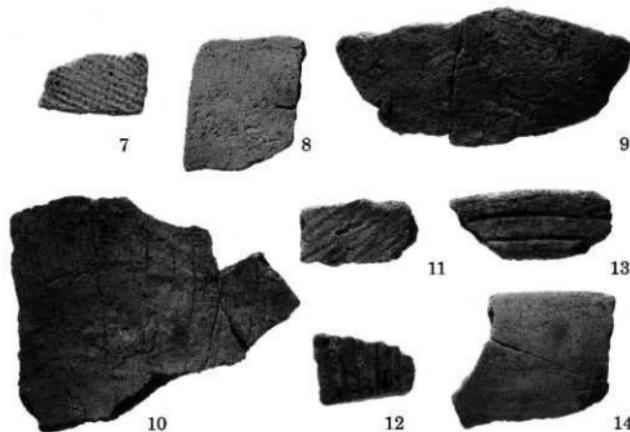
土坑 SK02 土層断面・土器出土状況



土坑 SK02 完掘状況



竪穴建物 S 101 1 期 繩文土器



竪穴建物 S 101 1 期 繩文土器



15



豎穴建物 S 101 繩文土器

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせはつくつちょうさがいよう きゅう							
書名	富山市内遺跡発掘調査概要IX							
副書名	北押川・墓ノ段遺跡							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	57							
編著者名	古川知明							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 Tel. 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2013年3月29日							
所取文化財名	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
	市町村	遺跡番号						
北押川・ 墓ノ段遺跡	富山市池多	16201	201373	36度 40分 40秒	137度 07分 25秒	20001004 ～ 20001019	352	墓地造成 (損壊確認)
所取文化財名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
北押川・ 墓ノ段遺跡	集落跡 窯跡	縄文 平安	竪穴建物・土坑 須恵器窯・木炭 窯・土坑	縄文土器 須恵器・土師器				
要約	<p>竪穴建物S I 01は、縄文中期中葉に属する。壁面は削平を受けて欠失する。主柱内側の床は叩き上間で、浅い溝が主柱を結ぶ。溝は高台側のみに構築される。柱配置は1回の建替、石組炉は2回以上の改修が認められる。最初の建物は5木または6木主柱構造で、円形配置となり、柱を結ぶ溝が巡る。住居は径4.6m～4.8mの円形住居が復元される。炉は石組炉で、大形の梢円形である。</p> <p>改修後の建物は、6木主柱構造で、長軸4.4m 短軸3.5mの梢円形に復元される。石組炉の位置は変わらず、最初の建物では長方形石組炉であったが、住居改修後は、内寸30cm角の方形石組炉に変更し、最終面では長方形石組炉に変化した可能性がある。</p> <p>住居内部からの出土遺物は少ない。</p> <p>竪穴建物S I 02は、S I 01と一部重複する。試掘で長方形炉石のみ検出した。構築時期は中期中葉であるが、S I 01との先後関係は不明である。</p> <p>その他の竪穴建物は、輪郭のみの検出である。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告 57

富山市内遺跡発掘調査概要IX

—北押川・墓ノ段遺跡—

2013（平成25）年3月29日

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2番24号

T E L : 076-442-4246 F A X : 076-442-5810

E-mail : maioubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 前田印刷株式会社

